第１回
小千谷市立小中学校の
在り方検討委員会

〇日　時　　令和７年２月２０日（木）１０：００～

〇場　所　　健康・こどもプラザあすえ～る　会議室

第１回　小千谷市立小中学校の在り方検討委員会

令和７年２月２０日（木）１０：００～
健康・こどもプラザ　あすえ～る　会議室

１　開会

２　委嘱状交付

３　教育長挨拶

４　自己紹介

５　委員長選出・副委員長指名

６　委員長・副委員長挨拶

７　諮問

８　議事
（１）検討委員会の趣旨と検討事項

（２）小千谷市立小中学校の現状と課題

（３）今後のスケジュール

９　その他

10　閉会

小千谷市立小中学校の在り方検討委員会　委員名簿

検討委員会構成メンバー　　計１８名

区　分	氏　　名	備　　考
学識経験者	遠藤　英和	新潟県立大学非常勤講師、元新潟大学教職大学院特任教授
	船岡　芳英	小千谷幼稚園理事長、元教育委員
	関　昌子	主任児童委員、元教育センター長
	鈴木　進五	学習塾経営者、前教育委員
学校	佐藤　浩一	小中学校長会会長
	菊地　亜弥子	小学校長会会長
	若林　靖人	中学校長会会長
学校保護者代表	大西　洋子	小千谷小学校 PTA 代表
	渡邊　類	東小千谷小学校 PTA 代表
	大場　亜梨沙	東小千谷小学校 PTA 代表
	森本　恵理子	小千谷中学校 PTA 代表
	渡邉　久美子	小千谷中学校 PTA 代表
地域代表	佐藤　正機	西小千谷地区代表
	木原　宏幸	東小千谷地区代表
	関　麻紀	南小千谷地区代表
	佐藤　正敏	北小千谷地区代表
小千谷青年会議所	和田　慶太	小千谷青年会議所代表
連合小千谷支部	大塚　貴裕	連合中越地域協議会小千谷支部　副支部長

写

小教第９６５号
令和７年２月２０日

小千谷市立小中学校の在り方検討委員会
委　員　長　様

小千谷市教育委員会
教育長　松井　周之輔

諮　問　書

小千谷市立小中学校の在り方検討委員会設置要綱に基づき、下記事項について諮問する。

記

【諮問事項】

①小学校及び中学校における学校の適正な規模

児童生徒が多様な学びの機会を得られ、健全な人間関係を築き、教育の質を維持するために望ましい学級数について。

②小学校及び中学校における適正な通学距離及び通学時間

児童生徒の安全面や負担面、交通手段等を総合的に勘案した適正な通学距離及び通学時間について。

③将来を展望した教育環境の在り方

市全体を考えた魅力あふれる望ましい教育環境の整備について。

【諮問理由】

当市では、少子化に伴う児童生徒数減少が急速に進んでいる。小学校では、学校規模がアンバランスな状態となっており、突出して児童数が多い大規模校とクラス替えができない小規模校・過小規模校が発生している。小規模校では、集団の中で多様な考えに触れる機会が少ないことや、過小規模校では複式学級の発生により、発達段階よりも一段階上の学習を行っており、児童に大きな負担をかけているといった課題が生じている。中学校では、生徒数が少ないことで、専門の免許を持っている専任教員の配置ができていないことや、部活動種目で生徒の興味や適性に合った選択ができないこと、1 校でのチーム編成が困難であるといった課題が生じている。

このように、学校の本来の特性である児童生徒が集団で協力・切磋琢磨しながら学び、成長していくことが困難であり、今後も当市の教育環境に大きな影響を及ぼすことが見込まれるため、これらの課題に対して早急な対応が必要である。

以上の状況を踏まえ、当市全体の将来を展望した持続可能で魅力あふれる教育環境の在り方について検討いただきたく、貴委員会に諮問するものである。

小千谷市立小中学校の在り方検討委員会設置要綱

（令和７年１月２０日教育委員会告示第１号）

（設置）

第１条　小千谷市立小中学校の児童生徒数の減少を踏まえ、将来を展望した学校や教育環境の在り方について検討を行うため、小千谷市立小中学校の在り方検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第２条　委員会は、次に掲げる事項について検討し、小千谷市教育委員会（以下「教育委員会」という。）へ意見を述べるものとする。

(1) 本市全体の持続可能な教育環境の整備に関すること。

(2) 小中学校の望ましい学校規模の在り方に関すること。

(3) その他教育委員会が必要と認める事項に関すること。

（組織）

第３条　委員会は、委員２０人以内で組織する。

２　委員は、次に掲げる者のうちから教育委員会が委嘱する。

(1) 学識経験者

(2) 学校保護者代表者

(3) 学校関係者

(4) 地域代表者

(5) その他教育委員会が必要と認める者

（任期）

第４条　委員の任期は、委嘱の日から第２条に規定する所掌事務が終了する日までとする。

（委員長及び副委員長）

第５条　委員会に委員長及び副委員長を置く。

２　委員長は、委員の互選により選出し、副委員長は委員の中から委員長が指名する。

３　委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（会議）

第６条　委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集し、その議長となる。ただし、委員会設置後の最初の会議は教育長が招集する。

２　会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

３　委員長は、必要があると認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

（庶務）

第７条　委員会の庶務は、教育・保育課において処理する。

（その他）

第８条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附　則

この要綱は、公表の日から施行する。

１．検討委員会の趣旨と検討事項

検討委員会の趣旨

小千谷市では、少子化に伴う児童生徒数の減少が急速に進んでおり、国立社会保障・人口問題研究所によると 0～14 歳の人数が 2020 年には 3,828 人だったのが、2050 年には半分以下の 1,671 人になると推計されている。この児童生徒数の減少が小中学校に大きな影響を及ぼしている。

小学校では、大規模校（1 校）や過小規模校（3 校）が発生しており、学校規模がアンバランスな状態となっている。大規模校では、人数が多いことで落ち着きがない環境になりやすく、これにストレスを感じ、不登校となってしまう児童が増加している。小規模校・過小規模校ではクラス替えができず、固定化された狭い人間関係が形成され、集団の中で多様な考えに触れる機会が少ない。過小規模校では、複式学級が発生し、発達段階よりも一段階上の学習を行っており、児童に大きな負担をかけているといった課題が生じている。

中学校では、生徒数が少ないことで、専門の免許を持っている専任教員をすべての教科では配置できておらず、教科指導の質の低下のおそれがある。また、部活動種目の選択の幅が学校によって偏り、生徒の興味や適性に合った選択ができないことや、1 校でのチーム編成が困難であるといった課題が生じている。

このように、学校の本来の特性である児童生徒が集団で協力・切磋琢磨しながら学び、成長していくには、教育の質の維持が困難な状態であり、今後も当市の教育環境に大きな影響を及ぼすことが見込まれる。

こうした現状を踏まえ、児童生徒にとってよりよい教育環境を提供するとともに、地域社会全体での持続可能な学校運営を実現するため、これらの課題に対して早急な対応が必要である。

本検討委員会は、学識経験者や保護者、地域等の意見を取り入れながら、将来を展望した教育環境の在り方を検討することを目的として設置する。

検討事項

小千谷市の現状と課題を踏まえ、下記事項について議論・検討を行い、教育委員会に答申を提出する。

○小学校及び中学校における学校の適正な規模

児童生徒が多様な学びの機会を得られ、健全な人間関係を築き、教育の質を維持するために望ましい学級数について。

○小学校及び中学校における適正な通学距離及び通学時間

児童生徒の安全面や負担面、交通手段等を総合的に勘案した適正な通学距離及び時間について。

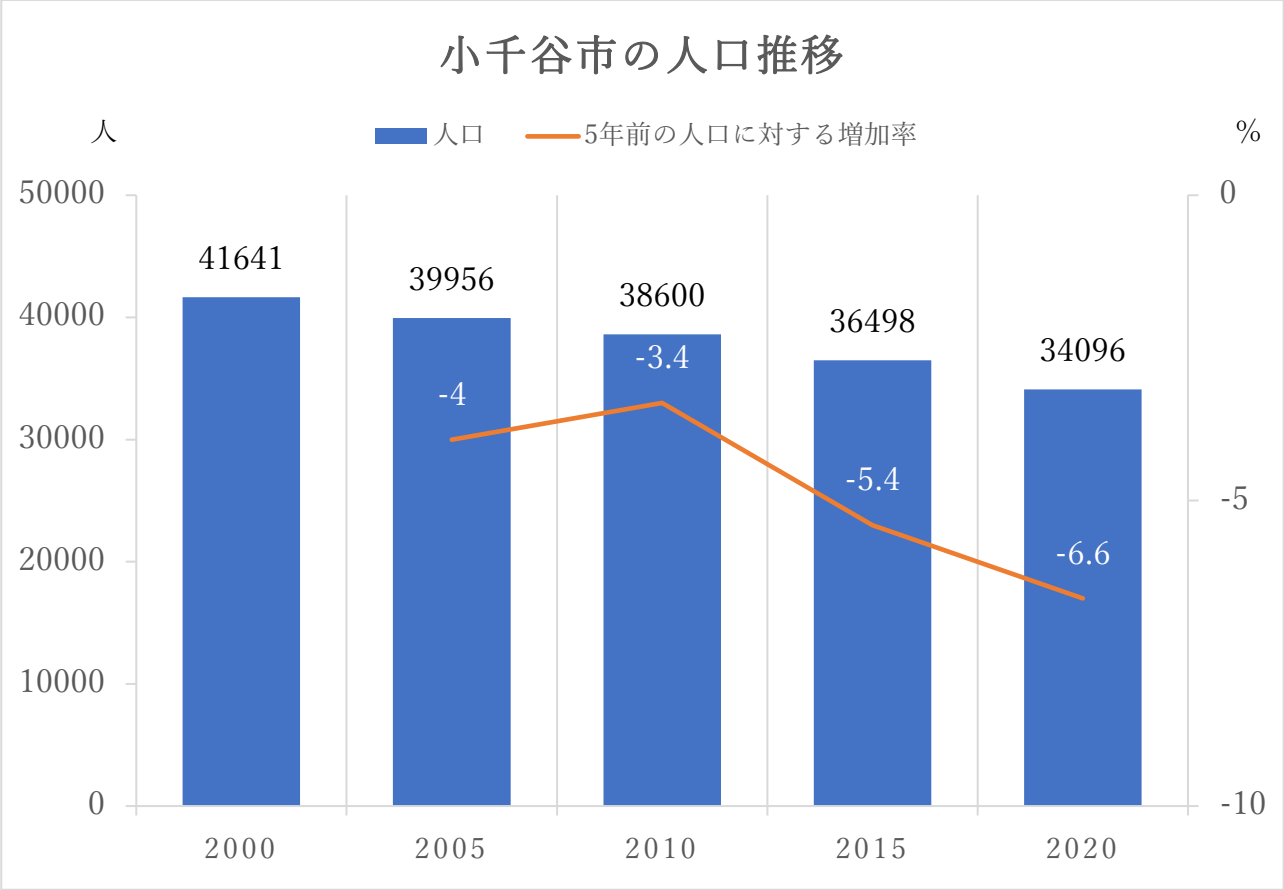
○将来を展望した教育環境の在り方

市全体を考えた魅力あふれる望ましい教育環境の整備について。

２．小千谷市立小中学校の現状と課題

小千谷市の現状

・小千谷市の人口は、2000 年で 41,641 人ですが、2020 年には 34,096 人となっている。
（7,545 人減、18.1%減）
・国立社会保障・人口問題研究所によると 2030 年には 29,546 人となると推計されている。
2050 年まで 5 年ごとに 7～9%の減少が続いていくと見込まれる。
・2024 年には人口戦略会議で「消滅可能性自治体」に指定された。



小千谷市立小中学校について

小千谷市は小学校８校、中学校５校、特別支援学校１校を設置している。

【小学校】

学校名	児童数	学級数	教職員数	所在地
小千谷小学校	674	31	54	土川 1 丁目 5 番 52 号
東小千谷小学校	216	10	20	旭町 7 番 6 号
吉谷小学校	34	4	8	大字西吉谷甲 216 番地
千田小学校	146	9	16	大字千谷甲 1231 番地
和泉小学校	63	6	10	高梨町 580 番地
東山小学校	16	4	8	大字小栗山 2357 番地
南小学校	80	7	12	真人町丁 678 番地
片貝小学校	148	9	17	片貝町 8643 番地

【中学校】

学校名	生徒数	学級数	教職員数	所在地
小千谷中学校	461	20	40	城内 4 丁目 3 番 26 号
東小千谷中学校	132	7	15	東栄 3 丁目 6 番 14 号
千田中学校	98	6	13	大字千谷甲 1617 番地
南中学校	52	4	13	真人町丁 678 番地
片貝中学校	94	6	13	片貝町 8787 番地 2

【特別支援学校】

学校名	児童・生徒数	学級数	教職員数	所在地
総合支援学校（小学部）	19	7	42	大字塩殿甲 2144 番地
総合支援学校（中学部）	14	5		
総合支援学校（高等部）	22	6		

※令和６年５月１日現在

学校統合の推移

（１）小学校

	昭和31年当時	昭和40年代まで	昭和50年～	昭和60年～	平成元年～	平成10年～	平成20年～	学番	現在（令和6年）
小学校	小千谷	S31.4　千谷川小廃止、小千谷小へ統合						1	小千谷
	山口	S32.4　山口・時水・桜町３小廃止、小千谷小へ統合　時水分校設置 S43.4　時水分校廃止、本校へ吸収							
	時水								
	桜町								
	上片貝					H16.4　上片貝小廃止、小千谷小へ統合			
	山谷						H21.4　山谷小廃止、小千谷小へ統合		
	東小千谷							2	東小千谷
	横浦	S41.4　横浦小廃止、東小千谷小へ統合							
	吉谷							3	吉谷
	二俣分校	S31.4　二俣分校廃止、本校へ吸収							
	若栃					H17.4　若栃小廃止、吉谷小へ統合			
	市之沢分校	S44.4　市之沢分校廃止、本校へ吸収							
	北山		S56.4　北山小廃止、若栃小へ統合						
	池ケ原					H19.4　池ケ原小廃止、吉谷小へ統合			
	千田							4	千田
	三仏生	S44.4　三仏生小・高梨小廃止、三高小新設 45.1　和泉小と改称						5	和泉
	高梨								
	南荷頃					H14.4　南荷頃小・小栗山小・塩谷小廃止、東山小新設		6	東山
	小栗山								
	塩谷		S52.4　字十二平児童、古志・東竹沢小へ区域外就学						
	十二平分校	S43.4　十二平分校廃止、本校へ吸収							
	塩殿						H25.4　塩殿小廃止、南小新設	7	南
	川井						H25.4　川井小廃止、南小新設		
	冬井・戸屋分	S48.4　冬井・戸屋分校・内ヶ巻分校廃止、本校へ吸収							
	内ヶ巻								
	岩沢						H25.4　岩沢小廃止、南小新設		
	小土山			S60.4　小土山小廃止、岩沢小へ統合					
	大崩				H5.4　大崩小廃止、岩沢小へ統合				
	真人						H25.4　真人小廃止、南小新設		
	芋坂分校	S40.4　芋坂分校廃止、岩沢小へ統合							
	片貝							8	片貝

（2）中学校・総合支援学校

	昭和31年当時	昭和40年代まで	昭和50年～	昭和60年～	平成元年～	平成10年～	平成20年～	学番	現在（令和6年）
中学校	小千谷	S31.4　土川分校1年生を小千谷中へ吸収	S56.4　吉谷中の吉谷小学校区を統合					1	小千谷
	土川分校	S31.11　土川分校廃止、小千谷中へ吸収							
	上片貝分校	S35.4　上片貝分校を廃止、小千谷中へ吸収							
	塩殿分校		S56.4　塩殿分校廃止、南中学校へ統合						
	東小千谷							2	東小千谷
	東山			S62.4　東山中廃止、東小千谷中へ統合					
	小栗山分校	S32.11　小栗山分校・塩谷分校廃止、独立校舎を新築、東山中へ吸収							
	塩谷分校								
	千田							3	千田
	高梨分校	S45.4　片貝中高梨分校を千田中へ吸収							
	吉谷		S56.4　吉谷中を廃止、吉谷小学校区を小千谷中へ統合 ・池ケ原小学校区を南中へ統合					4	南
	岩沢		S56.4　岩沢中・真人中・小千谷中塩殿分校を廃止、南中へ統合						
	大崩分校	S32.4　岩沢中小土山分校、川井中冬井・戸屋分校廃止、岩沢中へ吸収 S43.4　川井中を廃止、内ヶ巻分校・大崩分校を岩沢中へ統合 S40.4　真人中の芋坂・時の島地区を岩沢中へ統合							
	小土山分校								
	川井								
	冬井・戸屋分校								
	内ヶ巻分校								
	真人		S56.4　真人中廃止、南中学校へ統合						
	北山分校	43.4　真人中北山分校、若栃分校を廃止、真人中へ吸収							
	若栃分校								
	片貝	S45.4　片貝中高梨分校廃止千田中へ統合						5	片貝
特別支援学校							H26.4　総合支援学校開校	1	総合支援学校

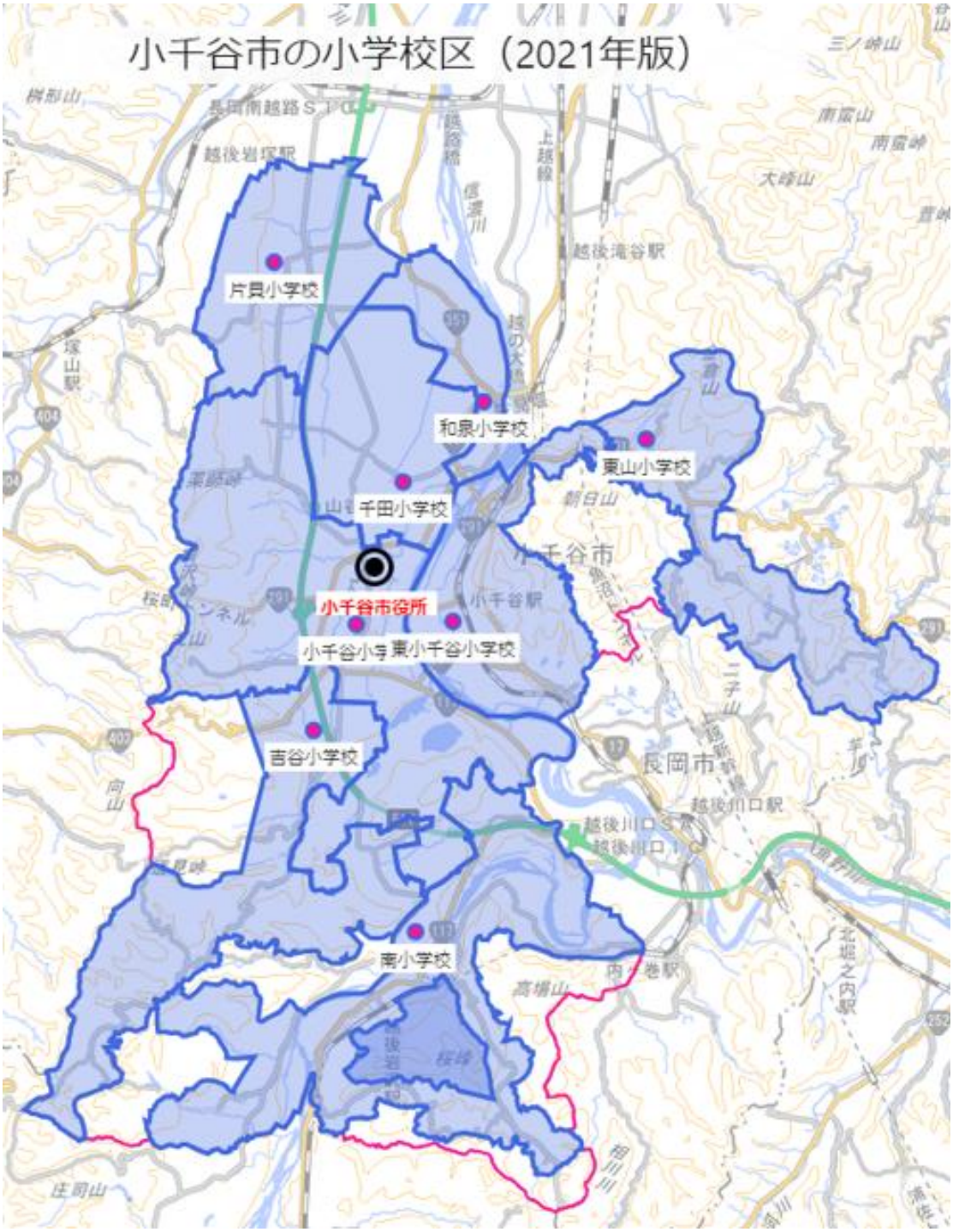
通学区域

小千谷市立学校の通学区域は、以下の表のとおり定めている。

学校名		通学区域
小千谷中学校	小千谷小学校	土川１丁目　土川２丁目　上ノ山１丁目から５丁目　本町１丁目　本町２丁目　平成１丁目　平成２丁目　稲荷町　元町　日吉１丁目　日吉２丁目　船岡１丁目から３丁目　栄町　山本　西中　上片貝　時水　桜町（上）、（中）、（下）　両新田　薮川　若葉１丁目から３丁目　平沢１丁目　平沢２丁目　千谷川１丁目から４丁目　城内１丁目から４丁目　山谷坪野（下）
	吉谷小学校	谷内　池ケ原　古田　池中新田　打越　上村　水口　滝谷　藤田沢　高畑　茶合　二俣　迯入　四ツ子　市之沢　山新田　芹久保　若栃　北山　孫四郎
東小千谷中学校	東小千谷小学校	薙生　東栄１丁目から３丁目　元中子　信濃町　山寺　旭町　木津町　木津団地　津山町　浦柄　横渡
	東山小学校	塩谷　荷頃　蘭木　岩間木　首沢　朝日　寺沢　中山　小栗山
千田中学校	千田小学校	千谷　小栗田
	和泉小学校	三仏生　高梨　五辺
南中学校	南小学校	坪野（上）　細島　塩殿　卯ノ木　内ケ巻　川井本田　新田　真皿　冬井　戸屋　芋坂　時之島　桂　山谷　市ノ口　岩山　池之又　田代　小土山　外之沢　大崩　池之平　上沢　万年　栗山　本村　干三　源藤山　石名坂　中山
片貝中学校	片貝小学校	一之町　二之町　茶畑　町裏　表三之町　稲場　屋敷　沼田　四之町　高見　新屋敷　五之町　八島　池津　山屋　鴻巣
総合支援学校		市内一円

…小学校時のみスクールバスに乗車
…中学校時のみスクールバスに乗車
…小・中学校時ともにスクールバスに乗車
※一部区域の児童生徒が利用できる地区、冬期間のみ利用できる地区も含めています。

学校区地図



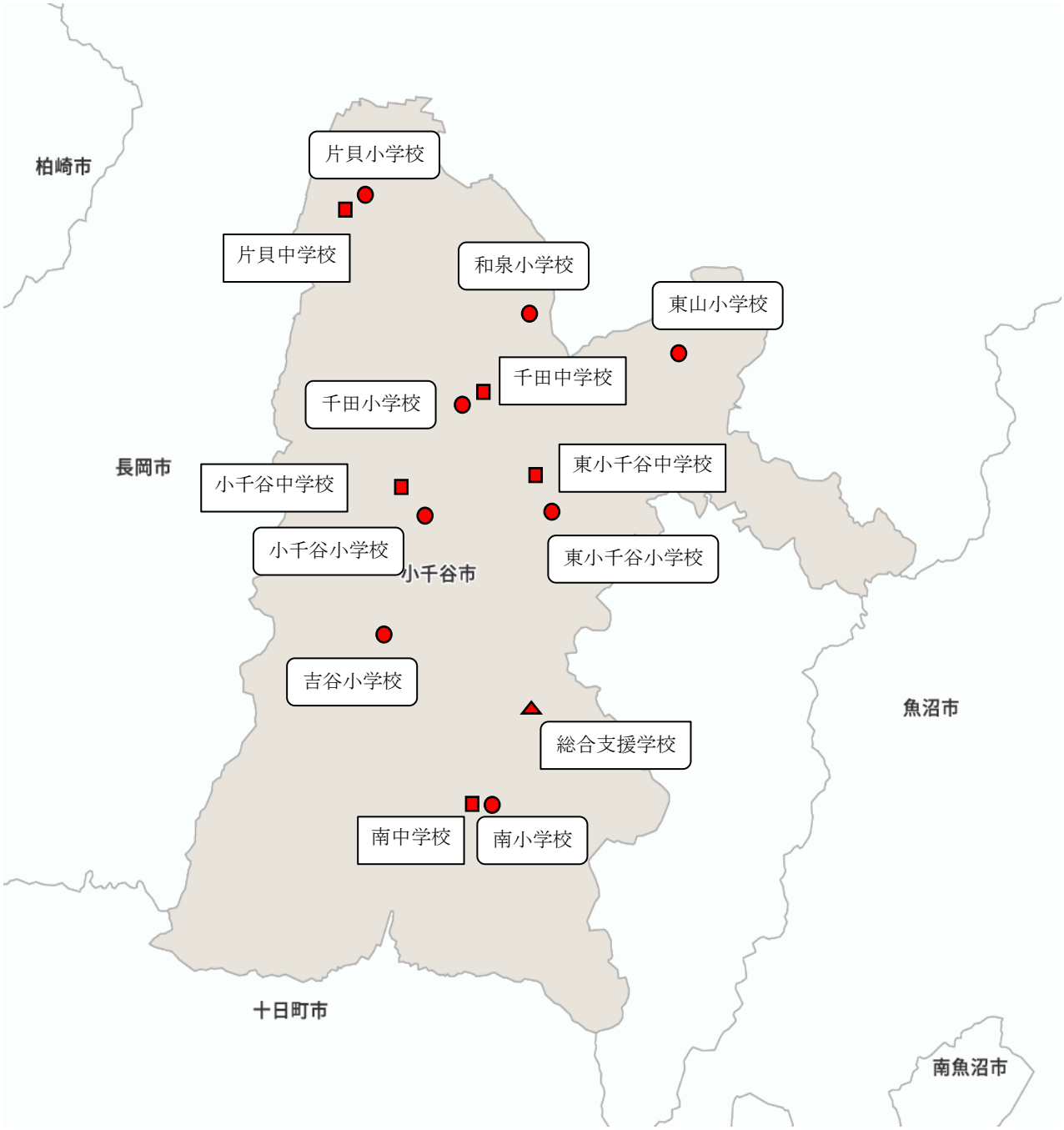
（学区マップ：https://school.mapexpert.net/より）

【参考：国の通学基準】

通学距離：小学校おおむね４km以内、中学校おおむね６km以内

通学時間：小・中学校ともにおおむね１時間以内

学校配置図


柏崎市
片貝小学校
片貝中学校
和泉小学校
東山小学校
千田中学校
千田小学校
長岡市
東小千谷中学校
小千谷中学校
小千谷小学校
小千谷市
東小千谷小学校
吉谷小学校
魚沼市
総合支援学校
南中学校
南小学校
十日町市
南魚沼市

小千谷市教育委員会の取組

〇おぢやっ子教育プラン
　小千谷市教育委員会は、第五次小千谷市総合計画の教育分野の基本目標「人を育み文化の香るまちづくり」の実現に向け、全市で取り組む学校教育の指針として『おぢやっ子教育プラン』を定めている。

【目指す子どもの姿】
「自ら考え　心豊かに　たくましく生きる　小千谷の子ども」

「自ら考え」…主体的に取り組み確かな学力を身に付ける
「心豊かに」…感謝する・相手を思いやる・他の人と協力してやりとげる
「たくましく生きる」…あきらめずに挑戦する・命を大切にする・健康な身体をつくる

〇たて糸とよこ糸がおりなす小千谷のひとづくり
　県の重点や社会情勢を踏まえた上で、小千谷市で特に大切にしてほしい取組を「たて糸（各学校の特色ある教育活動）」と「よこ糸（家庭、地域〉）」で表している。

＜たて糸（小千谷の学校の特色ある教育活動の推進）＞
・「おりなす教育推進事業」の推進
⇒『おぢやっ子教育プラン』の目指す子どもの姿の具現を図るため、将来を担う人材を育成していく。

・ふるさと教育
⇒ふるさとを知り、ふるさとに学ぶ学習活動を通して、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもを育てる。

・キャリア教育
⇒子どもたちが自立して社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことができるよう、職場体験や「おぢやしごと未来塾」を実施し、将来を担う人材育成を図る。

・防災教育
⇒震災対応の方法を学び、「自分の命は自分で守る」防災意識をもった子どもを育てる。「おぢや防災塾」や防災給食、そなえ館の活用などを通して、防災教育を進める。

＜よこ糸（心の拠り所としての「家庭」、見守り支える所としての「地域」）＞
・子どもの話に耳を傾け、家庭でのコミュニケーションを大切にする。
・家庭の中でも外でも、しっかりとしたあいさつができるようにする。
・地域の行事や活動、スポーツなどを通して、子どもの豊かな学びや成長を後押しする。
・子どもの安全・安心を守る活動に、学校、家庭と連携して取り組む。

【取組の成果】
・自分が住む地域に関心を持つと同時に、自分の将来について考える機会の創出
・地域教材を活用し、地域の方と交流することによる、郷土愛の育成

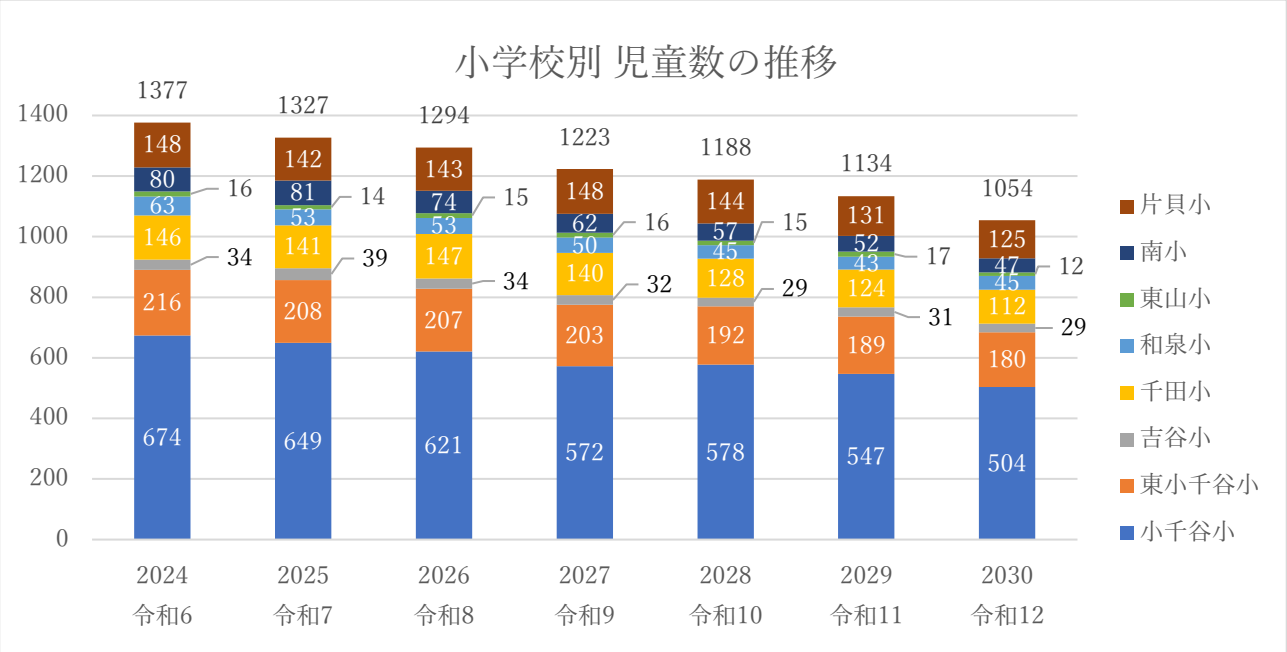
各学校の特色

学校	特色
小千谷小学校	公立小学校として日本一の歴史を誇り、中越大震災復興シンボルとして建てられた校舎で、地域に開かれた学校づくりを推進している
東小千谷小学校	令和 7 年度に統合 100 周年を迎える伝統校であり、児童同士の関わりの中で、進んで自己表現できる児童の育成を目指す
吉谷小学校	郡殿の池をはじめとする自然や歴史・文化に恵まれた地域であり、郷土愛と地域との連携活動が充実
千田小学校	「子どもを真ん中に据えた教育活動」、大人も子どもも「気付き、考え、行動する」を基盤とした教育活動
和泉小学校	縦割り班活動におけるリーダーシップ、フォロワーシップの育成やあいさつやマナーの徹底など、ともに高まる教育活動を推進
東山小学校	国の重要無形民俗文化財に指定の牛の角突きが伝統で、角突き牛「牛太郎」を飼育、震災を風化させないための防災教育に取り組んでいる
南小学校	中学校と建物を共用しており、児童生徒職員の交流が盛んに行われており、児童と職員が元気で楽しい教育活動を展開している
片貝小学校	前身は江戸時代の私塾「朝陽館」で、片貝独自の文化をもち、「木遣（きやり）」「巫女爺（みこじい）」などの伝統文化を受け継いでいる
小千谷中学校	目指す学校の実現に向け、生徒だけでなく、教職員一人一人が「チーム谷中」としての自覚を高め、英知と能力の結集を図っている
東小千谷中学校	建学時の校訓「文質彬々（ぶんしつひんぴん）」を実現すべく、「知・徳・体」の調和のとれた人間形成を目指す
千田中学校	「文武両道の千心」を掲げ、学力と体力のバランスを大切にし、「自信をもって行動できる生徒」の育成に取り組んでいる
南中学校	少人数のよさを生かし、異学年や全校活動、柔軟な編成による校外学習で子どもたちの社会性育成に取り組んでいる
片貝中学校	生徒は保育園から 10 年以上同じ構成であり、凝集性が高く、他者と強調し、よりよく生きる資質・能力を育成している
総合支援学校	市内校園サポートや市内関係者の理解啓発、力量向上の取組など、特別支援教育センター的機能を発揮している

1　児童生徒数の今後の見込み

（1）小学校

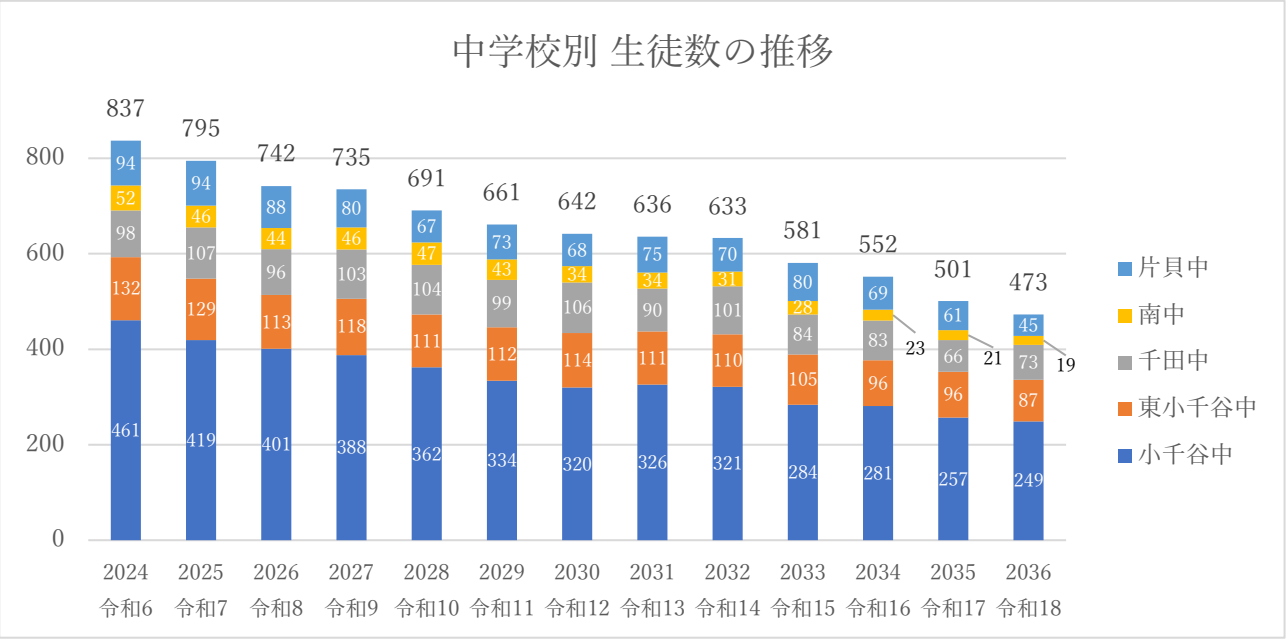
・小学校の児童数は年々減少しており、令和６（2024）年で、1,377 人だが、令和 12（2030）年には 1,054 人となる見込みである。（323 人減　23.5%減）



（2）中学校

・中学校の生徒数も年々減少しており、令和６(2024)年で、837 人だが、令和 12　(2030)年には 642 人となる見込みである。（195 人減、23.3%減）

・さらに、令和 18（2036）年で 473 人となり、令和６（2024）年から 12 年の間に 364 人減、43.5%減となる見込みである。



２　学校規模の現状と今後の見込み

・学校規模は、国の法令上、小・中学校とも 12～18 学級を標準としている。
・小学校の現状（令和６（2024）年度）は、小学校８校中、大規模校１校、標準規模校０校、小規模校４校、過小規模校３校である。
・中学校の現状（令和６（2024）年度）は、中学校５校中、大規模校０校、標準規模校１校、小規模校４校、過小規模校０校である。
・中学校は、令和 12（2030）年度は、中学校５校とも小規模校となる。また、令和 15（2033）年度から、南中学校は過小規模校となり、複式学級が発生する見込みである。

学級数による学校規模の分類（特別支援学級の学級数は除く）

学校規模の分類		過小規模校	小規模校	標準規模校	大規模校	過大規模校
学級数	校種	小　１～５ 中　１～２	小　６～11 中　３～11	12～18	19～30	31～
令和６年度	小学校	吉谷小３ 和泉小４ 東山小３	東小千谷小７ 千田小６ 南小６ 片貝小６		小千谷小22	
	中学校		東小千谷中５ 千田中４ 南中３ 片貝中３	小千谷中13		
＜参考＞ 令和12年度 試算	小学校	吉谷小３ 和泉小４ 東山小３ 南小５	東小千谷小６ 千田小６ 片貝小６	小千谷小17		
	中学校		小千谷中９ 東小千谷中４ 千田中３ 南中３ 片貝中３			
＜参考＞ 令和18年度 試算	中学校	南中２	小千谷中７ 東小千谷中３ 千田中３ 片貝中３			

令和７年度　学級編制基準（新潟県）

単式学級	小学校	１～３学年 35 人以下 1・2 学年は 32 人以下も可	４～６学年 35 人以下
	中学校	40 人以下 35 人以下（下限 25 人）の実施	
複式学級	小学校	引き続く２の学年の合計が 16 人以下 第１学年の児童を含む学級は８人以下	
	中学校	引き続く２の学年の合計が８人以下	

３　学校規模による課題

（１）小学校

ア　学校規模のアンバランス

・小千谷小学校１校が突出して規模が大きく、他の７校は１学年１学級の単式学級校と複式学級校である。学校規模のバランスがよくない。

イ　単式学級校・複式学級校の課題

・単式学級校及び複式学級校は、クラス替えができないことで児童の人間関係が固定化され、様々な人と関わり社会性を育む機会が限られてしまう。特に、片貝小学校、南小学校は１小１中学区であり、保育園から中学校までの 12 年間、人間関係が固定化され、狭い人間関係になってしまう。

・吉谷小、和泉小、東山小の３校は、過小規模校であり、複式学級が発生している。理解度や達成度など個人に応じたきめ細やかな学習指導を行うことができる反面、集団での学習が必要な教科で効果的な学習を組織しづらい。

・複式学級は、ＡＢ年度方式を採用しているため、発達段階よりも一段階上の学習を行っていることから、児童に大きな負担をかけている。また、教師にとって、２学年分の教材研究、授業準備が必要となり、負担が大きい。国語や算数などで複式授業を実施している場合は、１人の学級担任が２つの学年を行き来する直間指導となる場合が多い。そのため、個別学習の時間が多くなり、考えや意見を出し合う機会が少なくなってしまう。

→国語、算数は可能な限り複式授業の解消を図り、学年ごとに授業を実施しているが、教員の持ち授業時数が多くなり、負担も大きい。

ウ　小規模校の課題

・小規模校は児童一人一人に目が行き届きやすく、きめ細やかな指導が行いやすい。また、集団活動においては一人一人に与えられた役割と出番があり、成長を生み出すことができるというメリットがある。

・しかし、集団の中で、多様な考えに触れたり、切磋琢磨したりする機会が少なくなりやすく、多様な学習経験や生活経験が不足する可能性がある。

→小規模校だからこそできる教育、この地域だからこそ学べる魅力あるオンリーワンの学校づくりに取り組んでいる。小千谷の豊かな自然環境や特色ある文化活動を活かした体験活動を活発に行っている。また、地域資源を生かし、地域の方々と関わり、地域に根差した学習「ふるさと教育」を行っている。

エ　大規模校の課題

・大規模校は、子ども同士が切磋琢磨する機会が多く、多様な意見や考えが出やすい。また、クラス替えを通して多様な人間関係に触れることができる。様々な配慮が可能になるため、一つの集団で人間関係がうまくいかなくても、他の集団でやり直す機会を得やすい。また、学校行事が活発になるといったメリットがある。

・小千谷小学校は大規模校のため、１学級の児童数が 35 名程度と人数が多いために落ち着きがない環境になりやすい。そのためストレスを感じる児童も多く、不登校者数が多くなる傾向がある。また、教職員数が多いので、情報の共有化や意思疎通を図ることが課題となっている。

（２）中学校

① 教職員数の減少

ア 非常勤講師の配置

・小千谷中学校１校の規模が大きく、他の４校は１学年１学級である。小千谷中学校以外の４校は、教職員定数が少ないため、すべての教科（10 教科）の専任教員を配置できない。

→芸能教科（音楽・美術・技術・家庭）は、非常勤講師を配置している。また、非常勤講師も免許取得者が少なく、臨時免許状を発行してしのいでいる。

イ １教科１人の教員配置

・１教科１人の教員配置もあり、同じ学年、同じ教科同士で、互いの指導力を高め合う機会を日常的にもてない教科が出てきている。特に、新採用教員にとっては、日常的に教科指導について相談できる教員がおらず、教科教育の指導力向上にとってマイナスである。

→令和７年度人事異動から広域（小千谷市・魚沼市・十日町市・南魚沼市・津南町）で新採用の配置について検討し、新採用教員の教科 1 人配置を極力避けるように考慮している。

② 生徒数の減少

ア 人間関係形成力の不足

・生徒は一定規模の集団の中で、多くの仲間や教職員と関わることによって、学び成長していく。しかし、南中、片貝中は１小１中学区であり、保育園から中学校までの 12 年間、人間関係が固定化され、狭い人間関係の中で学校生活を送っている。個々の特性をお互いによく理解しており、お互いの思いや行動傾向を汲み取って行動することができるが、幅広い人間関係や社会性が育ちにくく、高校進学後不適応を起こす生徒がいる。

イ 保護者の金銭的負担の増大

・生徒数が少ない学校は、給食費、制服代金、卒業アルバム代金、修学旅行費など保護者の金銭的な負担が大きくなっている。

→修学旅行は、合同修学旅行、または期日・交通機関・宿泊先を同一にした連合修学旅行を検討する時期にきている。

４　中学校における部活動の現状と課題、取組

（１）現状と課題

・生徒数の多い小千谷中学校は、部活動種目の選択肢が多くあるが、他の４校は部活動種目数が少なく、生徒の興味や適性に合った選択肢が得られない状況が増える懸念がある。

・チームスポーツ（野球、バスケットボール、バレーボール）は、自校のみでチーム編成をすることが困難な状況になっており、大会には合同チームで参加している。

・野球は、複数の中学校で休日は合同部活動を実施している。

・部活動を指導できる専門性がある教職員が減少しており、約半数の部活動顧問が未経験＝専門外の種目を指導している。そのため、生徒への適切な技術指導が難しくなっている。

生徒が選択できる部活動（令和６年度）

学校名		陸上	野球	ｿﾌﾄﾃﾆｽ	ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ	ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	卓球	剣道	ｸﾛｶﾝｽｷｰ	水泳	吹奏楽	美術（文化）
小千谷中	男	○	◎	○	○	○	○	○	○	△	○	○
	女	○	―	○	○	○	○	○	○	△	○	○
東小千谷中	男	○	◎	―	○	―	○	―	―	―	○	○
	女	○	―	―	―	○	○	―	―	―	○	○
千田中	男	―	◎	○	―	―	○	―	―	―	―	―
	女	―	―	○	―	◎	○	―	―	―	―	―
南中	男	○	◎	―	―	―	―	―	○	―	―	―
	女	○	―	―	―	◎	―	―	○	―	―	―
片貝中	男	―	◎	―	○	―	○	―	―	―	○	○
	女	―	―	―	―	○	○	―	―	―	○	○

○常時活動　◎常時活動（大会合同参加）　△大会参加のみ　ーなし

（２）取組

・専門的な知識・技能を有する部活動指導員を 15 名配置し、部活動の指導や大会の引率等を行うことで、生徒への専門的な指導の実現とともに教員の負担軽減を図っている。

・小千谷市は、令和７年８月（新チーム活動開始）から、休日、平日とも、可能な学校部活動を地域クラブ活動への移行（地域移行）を目指している。

・現在、学校部活動に開設されている部活動のスポーツ種目（陸上、野球、ソフトテニス、バスケットボール、バレーボール、卓球、剣道、クロカンスキー）、及び吹奏楽は、地域移行後も地域クラブ活動として開設し、生徒にとって有意義で持続可能な魅力ある体制を整備する。

・令和７年８月からは、休日に学校部活動は実施しない。平日は、生徒の心身の成長に一番適したゴールデンタイム（16：00～19：00）の活動実施を目指している。

・目指しているのは、休日、平日とも一体化した完全な地域移行であるが、課題も多い。そこで、平日２日（ゴールデンタイムに活動）・休日１日の地域移行（地域展開）を目指していく。

その他小規模校のメリットと課題

今後、以下のような課題が生じる可能性があり、これらを考慮して検討を進めていくことが必要である。

○小規模校のメリット

・一人ひとりの学習状況や理解度をしっかり把握でき、補充指導や個別のサポートがしやすくなる
・意見や感想を発表する機会が増える
・様々な活動で、誰もがリーダー役を経験できるチャンスが増える
・複式学級では、教員が複数の学年を指導する間に、児童生徒が互いに学び合う活動を充実させやすい
・体育館や運動場、特別教室などの施設が余裕をもって利用できる
・教材や道具を一人ひとりに行き渡らせやすくなる
・異なる学年が一緒に学ぶ機会を作りやすく、体験学習や校外学習を柔軟に行える
・地域の協力が得やすいため、地域の教育資源を活かした学びの活動がしやすい
・児童生徒の家庭環境や地域の教育状況を把握しやすく、保護者や地域と協力して効果的な指導ができる

○小規模校の課題

【学級数が少ないことによる課題】
・学年ごとにクラス替えができない
・クラス間で切磋琢磨するような教育活動が難しくなる
・支援がないと、習熟度別指導など、クラスを超えた多様な指導が難しくなる
・クラブ活動や部活動の選択肢が限られる
・運動会や文化祭、遠足、修学旅行などの集団活動や行事の効果が薄くなる
・男女の比率が偏りやすい
・上級生と下級生の交流が少なくなり、進学や進路選択の模範となる先輩が減る
・体育の球技や音楽の合唱・合奏などの集団学習を行うのが難しくなる
・班活動やグループ分けが制限される
・協力して学ぶ際に取り上げる課題に制約が生じる
・得意な子どもの考えにクラス全体が引っ張られる傾向が強くなる
・問題行動がある子どもがいる場合、その影響でクラス全体が影響を受ける
・児童生徒から多様な発言を引き出すのが難しくなり、授業が制約される
・教員と児童生徒との距離が近くなりすぎて、指導の効果に影響を与えることがある

【複式学級となることによる課題】
・教員に特別な指導技術が求められる
・複数の学年や教科に対応するため、教材研究や指導準備の負担が大きくなる
・指導順が単式学級と異なる場合、単式学級に転校した際に指導内容が抜け落ちる可能性がある
・実験や観察など、長時間の指導が必要な活動に制約が生じる
・兄弟姉妹が同じクラスになることで、指導上の制約が生じる場合がある

【教職員数が少なくなることによる課題】
・経験年数や専門性、男女比など、バランスよく教職員を配置し、それを活かした指導が難しくなる
・教員個人の力量に頼ることが増え、異動や毎年の教職員数の変動で学校経営が不安定になる可能性がある
・児童生徒の良さを多面的に評価することが難しく、多様な価値観に触れさせる機会が減る
・ティーム・ティーチング、グループ指導、習熟度別指導、専科指導など、柔軟な指導方法を取り入れることが困難になる
・教職員一人当たりの校務や行事の負担が重く、研修の時間が確保しにくい
・学年によって学級数や学級ごとの人数が大きく異なると、教員間で負担の不均衡が生じる
・平日の校外研修や他校での研究協議会への参加が難しくなる
・教員同士が互いに切磋琢磨する環境が作りにくく、指導技術の共有が進みにくい
・学校が抱える課題に対して、組織的に対応するのが難しい場合がある
・免許外の教科指導を行うことがある
・クラブ活動や部活動の指導者を確保するのが難しくなる

【参考：文部科学省 公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き】

学校施設の現状

（１）施設の状態と点検等の概要

学校施設は、小学校 8 校、中学校 5 校、特別支援学校 1 校の計 14 校からなり、その半数以上が昭和 40～50 年代に建設されたもので、30 年以上が経過している。平成 16 年に発生した中越大震災により学校施設が被害を受けたが、災害復旧工事で既に修復し、更に安心安全な教育環境を確保するため、平成 17 年度に行った耐震診断により耐震補強が必要と判断された建物については、平成 23 年度までに耐震補強工事を完了している。

各施設は、日常的な点検に加え有資格者による法定点検を実施しているが、建物の躯体や内外装、各種設備が経年により劣化しており、計画的な改修工事が必要となっている。

（２）施設の役割

学校施設は、主に校舎と屋内運動場で構成され、児童・生徒の学びの場であり、生活の場となっている。また、各学校の屋内運動場は、教育施設であるとともに、小千谷市地域防災計画において「指定避難所」に位置付けられており、災害時に地域の避難所となる重要な施設となっている。

（３）財政面

各学校施設は計画的に修繕を行っているが、ライフサイクルコストを低減するためには、計画的な大規模改修により施設の長寿命化を図っていく必要がある。

学校施設数が多く、老朽化の割合も高いため、維持管理や改修等の費用が嵩み、財政的に大きな負担となっている。そのため、今後の児童生徒数の推移から、市内公共施設の共同利用など、効率的な運用を図ることも検討する必要がある。

（4）各校の施設状況

小千谷小学校	
①普通教室棟　2010 年建築　築 15 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み	②特別教室棟　2010 年建築　築 15 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み
③第 1 屋内運動場（東） 2010 年建築　築 15 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定	④第 2 屋内運動場（西） 2010 年建築　築 15 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定

東小千谷小学校	
①管理教室棟（北）　1969 年建築　築 56 年 施設状態…重度の経年劣化 ★大規模改造工事（2016 年） ★耐震化済み	②教室棟（南）　1975 年建築　築 50 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み
③給食室　2013 年建築　築 12 年 施設状態…良 ★耐震化済み	④屋内運動場（東）　1971 年建築　築 54 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み ★避難所指定
⑤屋内運動場（西）　1984 年建築　築 41 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定	

吉谷小学校	
①管理教室棟　1976 年建築　築 49 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み	②特別教室棟　1981 年建築　築 44 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み
③屋内運動場　1982 年建築　築 43 年 施設状態…中度の経年劣化 ★屋根改修（ｶﾊﾞｰﾙｰﾌ）工事（2018 年） ★耐震化済み ★避難所指定	

千田小学校	
①管理教室棟　1984 年建築　築 41 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2018 年） ★耐震化済み	②給食室　2001 年建築　築 24 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★大規模改造工事（2018 年） ★耐震化済み
③屋内運動場　1985 年建築　築 40 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定	

和泉小学校	
①教室棟　1970 年建築　築 55 年 施設状態…重度の経年劣化 ★大規模改造工事（2013 年） ★耐震化済み	②屋内運動場　1970 年建築　築 55 年 施設状態…重度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定

東山小学校	
①校舎棟　2001 年建築　築 24 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み	②校舎棟　2005 年建築　築 20 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み
③屋内運動場　2001 年建築　築 24 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定	

南小学校	
①管理･普通教室棟　1980 年建築　築 45 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み	②特別教室棟　1980 年建築　築 45 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み
③普通教室棟　2013 年建築　築 12 年 施設状態…良 ★耐震化済み	④教務室棟　2013 年建築　築 12 年 施設状態…良 ★耐震化済み

片貝小学校	
①特別・普通教室棟（北） 1970 年建築　築 55 年 施設状態…重度の経年劣化 ★大規模改造工事（2010 年） ★耐震化済み	②特別・普通教室棟（東） 1988 年建築　築 37 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2022 年） ★耐震化済み
③給食棟　1988 年建築　築 37 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み	④屋内運動場（北）　1982 年建築　築 43 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2010 年） ★耐震化済み
⑤屋内運動場（南）　1989 年建築　築 36 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定	

小千谷中学校	
①特別教室棟　1982 年建築　築 43 年 施設状態…中度の経年劣化 ★長寿命化改良工事（2024 年） ★耐震化済み	②管理・普通教室棟　1983 年建築　築 42 年 施設状態…中度の経年劣化 ★長寿命化改良工事（2023 年） ★耐震化済み
③普通教室棟（東）　2011 年建築　築 14 年 施設状態…良 ★耐震化済み	④特別教室棟（東）　2011 年建築　築 14 年 施設状態…良 ★耐震化済み
⑤屋内運動場　1987 年建築　築 38 年 施設状態…中度の経年劣化 ★屋根改修（ｶﾊﾞｰﾙｰﾌ）工事（2020 年） ★耐震化済み ★避難所指定	

東小千谷中学校	
①管理教室棟　1979 年建築　築 46 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2010 年） ★耐震化済み	②管理教室棟　1979 年建築　築 46 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2010 年） ★耐震化済み
③特別教室棟　1986 年建築　築 39 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み	④屋内運動場　1981 年建築　築 44 年 施設状態…中度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定

千田中学校	
①管理教室棟　1991 年建築　築 34 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み	②屋内運動場　1976 年建築　築 49 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2010 年） ★耐震化済み ★避難所指定

南中学校	
①管理・普通教室棟　1980 年建築　築 45 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み	②特別教室棟　1980 年建築　築 45 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2011 年） ★耐震化済み
③教務室棟　2013 年建築　築 12 年 施設状態…良 ★耐震化済み	④屋内運動場　1981 年建築　築 44 年 施設状態…中度の経年劣化 ★大規模改造工事（2010 年） ★耐震化済み ★避難所指定

片貝中学校	
①校舎棟　1993 年建築　築 32 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み	②屋内運動場　1994 年建築　築 31 年 施設状態…軽度の経年劣化 ★耐震化済み ★避難所指定

総合支援学校	
①管理・普通教室棟　1990 年建築　築 35 年 施設状態…中度の経年劣化 ★外壁改修工事（2016 年） ★耐震化済み	②作業室棟　2020 年建築　築 5 年 施設状態…良 ★耐震化済み
③屋内運動場　1988 年建築　築 37 年 施設状態…中度の経年劣化 ★屋根改修（ｶﾊﾞｰﾙｰﾌ）工事（2021 年） ★耐震化済み ★避難所指定	

３．今後のスケジュール

日程	内容
２月２０日（木）	第１回検討委員会 ・検討委員会趣旨・目的について ・小千谷市の現状と課題について ・今後のスケジュールについて
３月１３日（木）	第２回検討委員会 ・小千谷市における魅力あふれる望ましい教育環境等について
４月	第３回検討委員会 ・小学校における適正な学校規模及び適正な通学距離・通学時間について
６月	第４回検討委員会 ・中学校における適正な学校規模及び適正な通学距離・通学時間について
８月	第５回検討委員会 ・第２回から第４回までの整理
９月	第６回検討委員会 ・答申について ・教育長へ答申を提出

答申をもとに教育委員会が主体となり、外部委員を交えた委員会を立ち上げ、学校の適正配置等について、保育園を含めて協議・検討を重ねていく。